2010年サンマ

単位：数量，1000トン、価格，円／kg

年	数量											
	漁獲	産地	輸入	輸出	東京			消費支出	在庫	加工		
					生	冷	開	生(グラム)		塩干	塩蔵	缶詰
21	311	298.7	0.08	75.4	17.1	0.7	2.9	2,462	64.4	31.1	13.7	14.8
22	217	192.6	3.39	60.4	11.8	0.7	2.5	1,690	28.4			
%	70	64	4,040	80	69	100	89	69	44	−	−	−

年	価格						全サンマ		
	産地	東京			輸入	輸出	水揚	価格	消費支出生(円)
		生	冷	開					
21	74	326	215	379	211	66	308.3	69	1,478
22	142	427	235	394	127	85	193.4	134	1,156
%	192	131	109	104	60	129	63	194	78

漁業・漁獲の動向と資源

太平洋近海から沖合にかけては日本、ロシア、台湾、韓国、中国が棒受網により漁獲している。日本のシェアは、2007～2009年の平均で60.2%であった。日本の漁獲量は1950年代から多くなり、1960年代後半から1970年代にかけて低水準で、1980～1990年にかけて回復し、1991～1997年は高水準であった。1998、1999年は低水準となったが、その後回復し、2008年は過去最高に達したが、2009年には減少した。

2010年漁期前調査によれば、西経165度～日本の沿岸に分布しているサンマの資源量は、2,213千トンで、2009年と比較し、減少した（前年比63.0%）。2010年級の加入尾数は、約306億尾で2005年以降では下から2番目であった。CPUEは、1980年代後半から1990年にかけて上昇し、1991～1997年は高水準であったが、一転して、1998、1999年は低水準となった。その後回復し、近年は高水準であったが、2009年漁期は低下した。2009年漁期のCPUEの水準から資源水準は中位、最近5年間の資源量の推移から資源動向は減少と考えられている。

22年の漁獲量は前年を大きく下回り21.7万トンであった。

本年も操業に当たって、各種休漁措置は前年同様実施されたが、盆休み休漁は撤廃、48時間休漁が９月中、10月中にそれぞれ1回と不漁を反映し従来よりもかなり少なかった。またロシア水域内操業も10月３日で終漁となった。

本年も前年同様操業は早く７月８日から流し刺網、同16日には5トン未満船の棒受網、23日及び26日（ロシア水域に入域しない漁船が23日）には10トン未満の棒受網の操業が開始された。そして全国サンマ漁業協会所属の棒受網の20トン未満小型船が8月2日、同20トン以上100トン未満中型船が8月5日、同100トン以上大型船が8月15日の解禁となった。

本年のスタート時（７月）の漁は昨年を大幅に下回る漁であった。期待された８月に入ってからも漁は低調に推移し、８月中の水揚げも１万トンにみたなかった。しかも盛漁期の9月に入ってからも例年の半分以下の水揚げにとどまり、10月以降、11、12月とやや盛り返したものの結果的には昨年をかなり下回る水揚げとなり12月下旬を持って終漁となった。その結果総水揚量も昨年をかなり下回った。

本年の初期漁場は流し網が昨年同様道東近海で始まり、８月に入って大型船出漁前の漁場も当所は日本近海には形成されず、152°E以東での操業となった。中旬に入って道東沖から択捉島沖にも漁場が形成されたが、一部の棒受網船は152°E以東での操業がみられたが下旬には消滅した。

９月に入ってからは択捉島南東漁場とともに下旬には襟裳岬南東海域にも拡がった。10月に入ってからは、上旬に道東沖～襟裳岬、そして中旬には一部道東沖に漁場は残ったが、主漁場は三陸沖一帯に形成された。11月に入ってからは、道東沖に僅かに漁場は残ったが、三陸～下旬には、常磐沖まで南下した。12月には、一部三陸南部に漁場が残ったものの、主漁場は常磐沖合に移った。本年のオホーツクでの漁獲は855トン（前年：0トン）であった。

魚体長は、本年は大型(29cm以上)の組成がやや増加し、通算では大型57％（42％）、中・小型43％（58％）であった。特に本年は12月中旬まで30cmにモードがみられ、12月中旬以降は大半が中小型魚であった。

魚価は、初漁期の７月にほぼ昨年並みに推移したが、８月は漁の伸びもなく若干の下げにとどまった。例年2ケタ台に落ちる９月に入ってからも200円近い魚価で堅調であった。10月以降はさすがに落ちてきたがそれでも10月は100円台をキープし、11月以降ようやく２ケタ台に下落した。また輸出の好調さは変わらず、価格は極端な下落にならなかった結果、浜値は142円で前年（74円）の２倍で推移した。

在　庫　量

本年は6.5万トンと近年では前年に続いて多い越年在庫から始まった。こうした高い在庫水準も年明け後の解凍サンマの出回りと輸出も順調で、かなり減少し例年在庫が最も少なくなる７，８月には２万トン弱まで減少した。しかも、漁が始まった以降例年急増する在庫も漁不振もあって、極端に在庫が多くなる中盤以降も多くならず、その結果越年在庫も４万トンと少なく前年（8.9万トン）を大幅に下回った。

平均在庫量は、上半期の在庫の多さを反映し、2.8万トンで前年（6.4万トン）を大幅に下回り、近年では最も少ない年となった。

消費地入荷量と価格

22年の東京中央卸売市場の入荷量は、生1.2万トン、冷700トンで前年（生1.7万トン、冷７００トン）をかなり下回った。

本年は、産地での水揚げが大幅に減少したことで、消費地市場への鮮魚も同様にかなり減少したのが特徴。

本年も東京消費地における入荷サイズは45尾、50尾主体であったが、やや痩せていた。

また、本年の塩干物の入荷は2.5千トンで前年(2.9千トン)を下回った。

本年も東京消費地価格のピークは例年７月にみられたが、本年は８月に入ってからの産地水揚げの不振もあり８月にみられ、それ以降９月も400円台を維持するなど周年を通じて堅調な推移になった。

平均価格は生427円(前年：326円)、冷235円(前年：215円)、塩394円(前年：379円)で、何れも原料価格の上昇を受け堅調に推移した。

また消費支出（１世帯当たり）をみると、出回りの少なさや価格上昇を受け数量、金額とも減少した。

輸　出　入

本年の輸入は、3,395トンで前年(85トン)を大幅に上回った。

これは本年、国内生産が不調に終わったことが要因である。

輸出はＨ４年をピークに近年減少傾向が続いていたが、このところ増勢基調に転じた。しかし、本年は国内漁の不振を反映し6万トンと前年（7.5万トン）を下回った。

価格は、輸入127円(前年：211円)、輸出85円(前年：66円)であった。

輸出国は、本年もロシアが圧倒的に多く、84%を占める50,649トンで、続いて中国、韓国、ベトナム、タイ、フィリピンであった。